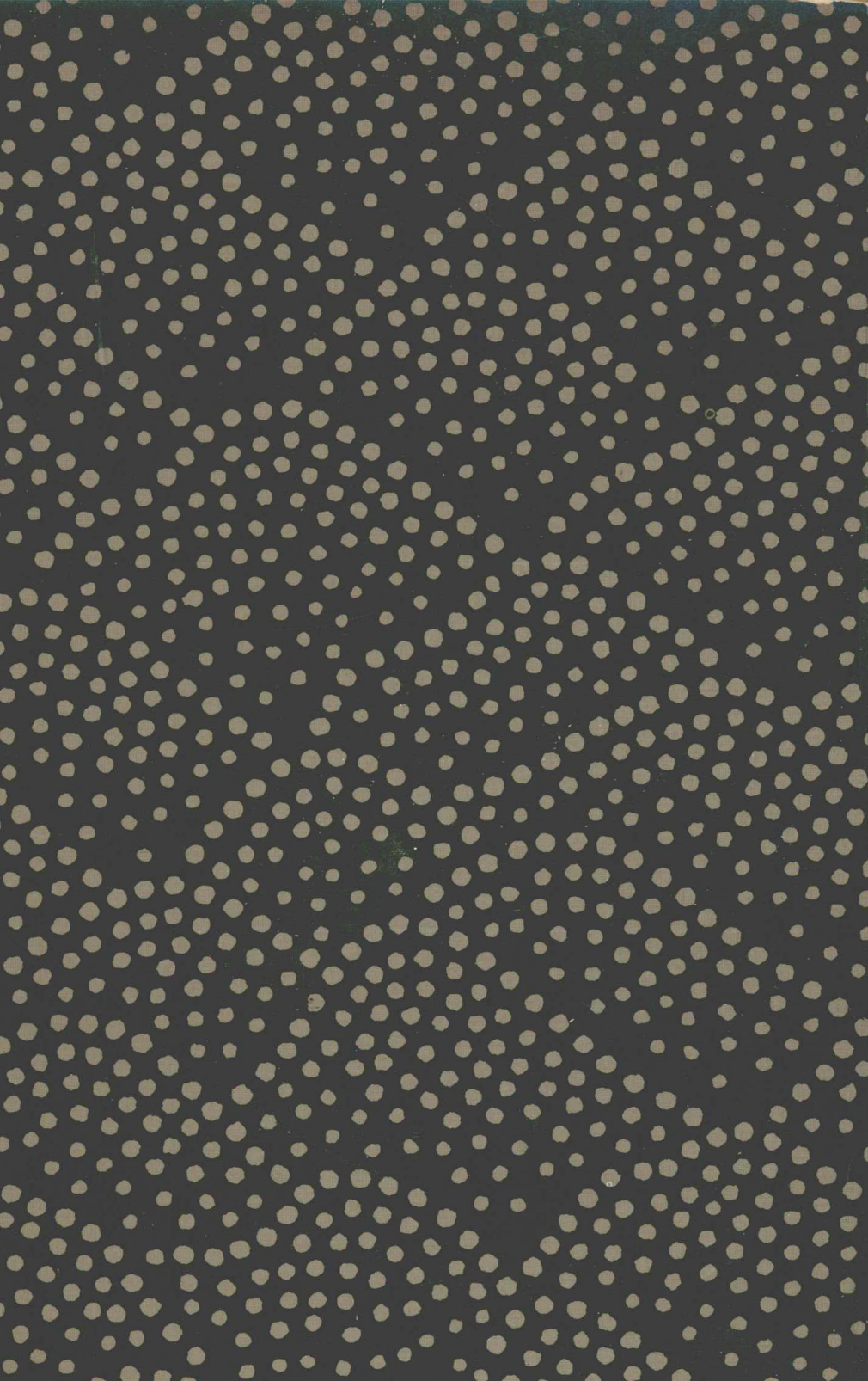




出席者略歴

いなおか・こうじ 一九一九年生まる。東京大学文学部卒業。現在東京大学教授。主要論文は「人麻呂歌集表記の原始的性格」（万葉集研究4）、「万葉集巻五の編纂に就いて」（上代文学22）、「大伴旅人・山上憶良」（講座日本文学・三省堂）など。

こみ・ともひで 一九〇八年生まる。東京大学文学部卒業。東京大学名誉教授。現在学習院大学教授。主要著書は「古代和歌」（至文堂）日本古典文学大系「萬葉集」（岩波書店）「日本の古典」（朝日新聞社）など。

あそ・みづえ 一九二九年生まる。東京大学大学院修了。現在共立女子短期大学教授。主要著書は「柿本人麻呂論考」（桜楓社）など。

そくら・たかし 一九三四年生まる。東京大学大学院修了。現在青山学院大学助教授。主要論文は「記紀歌謡と説話」（昭和41年6月号「国語と国文学」）「天智挽歌群統考」（上代文学5）など。

すずき・ひでお 一九三八年生まる。東京大学大学院修了。現在東京学芸大学助教授。主要論文は「古代和歌における心物対応構造」（昭和45年4月号「国語と国文学」）「古今の表の形成」（昭和49年5月号「文学」）「和歌の成立」（昭和50年8月号「文学」）など。

司会者の諒解により検印を省略します 5012

シンポジウム日本文学1

万葉集

昭和50年12月15日 初刷印刷
昭和50年12月20日 初刷発行

司会者 稲岡耕二
発行者 鶴岡隆巳

発行所 株式會社 學生社

東京都千代田区九段南2-2-4(郵便番号102)
電話 03 (263) 2611(代) 振替・東京18870番
編集担当 土屋晃三

落丁・乱丁本はおとりかえします
Printed in Japan



万葉集

出版者

稲岡耕二編集

五味智英

阿蘇瑞枝

曾倉岑

鈴木日出男

ポシウム日本文学

①

出席者

稲岡耕二（司会）

五味智英

阿蘇瑞枝

曾倉岑

鈴木日出男

装幀

杉浦康平＋鈴木誌

『シンポジウム』日本文学——万葉集・目次

第一章 初期万葉の抒情

△報告▽ 曾 倉 岑

初期万葉歌と記紀歌謡	二
磐姫伝承歌をめぐって	三
舒明の鹿鳴歌	二九
中皇命の歌	三〇
初期万葉の皇族・豪族	三〇
初期万葉の抒情の質	三五
言霊論	三六

第二章 人麻呂文学の達成

△報告▽ 阿 蘇 瑞 枝

人麻呂の年齢	三六
人麻呂の身分	三七
舍人論・後宮官人論などについて	三八
人麻呂歌集の問題	三九
旋頭歌について	四〇
歌集の表記について	四一
歌集編纂の目的	四二
歌風の変化について	四七

人麻呂の文学的達成	二三
-----------	----

第三章 山上憶良

△報告▽ 稲岡 耕二

婦化人論について	二三
憶良と人麻呂	二三
憶良と川島皇子	三六
巻五の編纂	四一
漢和混淆の形式	四六
憶良と旅人	五一
筑紫歌壇	五四
令反或情歌について	五八
思子等歌	六七
「代作」ということ	七三
貧窮問答歌	七六
評価の問題	七七
志賀白水郎歌の問題など	八四

第四章 万葉人の心と表現

△報告▽ 鈴木日出男

心物対応構造	一〇九
万葉の月	一〇七
叙景と抒情	一〇四
枕詞・序詞について	一〇〇
赤人における主観と客観	三三
神岳の歌	三九
旅人と自然	三三
類歌性について	三六
あとがき	四三
解説・注	四五
参考文献	五三
事項・書名索引	五五
人名索引	五八

万
葉
集

第一章 初期万葉の抒情

報告 曾 倉 岑

一 記紀歌謡との関係

初期万葉の中核的部分を前代詩歌の終末部的世界とする説（田辺）もあるが、むしろ和歌の成立期、抒情詩の成立期としてとらえるべきではないか（その際斉明天皇の歌などは和歌の方に入れる）。歌謡が自然に和歌に成長するなどは考えられないからである。

歌謡と和歌と区別した上で、「舒明・斉明朝よりも」前に、抒情詩は物語歌という形で成立している」という土橋説、「〈前抒情〉的抒情こそ記紀の歌謡の本質のひとつの側面」とする益田説にも問題がある。歌による抒情が現実に行なわれる以前の段階で、右のようなことは可能であろうか。また、初期万葉の実態——たとえば次項——を明確に説明しうるであろうか。初期万葉の歌に伝承や伝承歌と関係の深いものもあるが、その場合は伝承や伝承歌を作者の方に引きつけるのであり、伝承の中にはいり込んでいく右の場合とは、方向が逆である。

表現・発想その他、記紀歌謡から初期万葉が継承したものは多

分にあったであろうが、ただそれだけでは抒情詩の成立はありえなかったと考えるべきであろう。

二 作者と場

初期万葉の特徴として、作者の大部分が皇室関係者であることが挙げられる。またこのこととも関連するが、歌の場が、国見・行幸・遊獵・天皇の葬儀など、宮廷の儀式や行事と関係の深いことも指摘される（相聞は除く）。

作者の階層が高いことについては、「貴族階級は直接生産からはなれて閑雅を享受した最初の階級であり、かれらの心にあらたに目ざめる自我や感受性が種となって抒情詩は作られるようになった」という西郷説がある。一方、作者の異伝の存在などを根拠に代作説（伊藤・中西等）があり、極端な説としてこの時期の歌のすべてを前代からの伝承歌とする見解もある（遠藤）。代作説は、あるいは一部認められるかも知れないが、前代伝承歌説は無理ではないかと思う。初期万葉歌に明らかに認められる、記紀歌謡と

は異なる個性や自由さを、まったく無視することはできないからである。

場を持つ歌という点では記紀歌謡と同じであるが、場の種類は変化しているし、場において占める歌の位置や意味も異なるのではなからうか。たとえば行幸時の額田王や中皇命の歌などは、儀礼との関連がなぜかきわめて薄い。場の規制力が緩んだとも考えられるし、逆に場の規制を（軽くしか）受けない立場、個性を考へることもできよう。

三 歴史的背景——中国文化の影響

抒情詩の成立に不可欠と考えられる自我や個性の伸長には、それにみあう生活——歴史的背景があつたであらう。「万葉集第一期は日本古代国家生誕の陣痛期であり、苦闘の連続であると同時に又積極的な建設的な希望の輝いて居た時代」であり、皇室歌人が名歌を多く残した基盤は「当時の皇室に漲って居た強い生命力であつたのである。当時の皇室は逞しい生活力を以て人々の先頭を切って進む実力者であつた」（五味）とされる。一方、衰退する皇室を背景に、または現実政治に背を向けたところに成つた歌を初期万葉の中心とする説（田辺）もある。

中国文化の影響・刺激も無視できない要素であらう。大化改新以降近江朝に至る時期における影響のいちじるしさと和歌の具体

的变化を指摘する説（中西）がある。それ自体興味ある指摘であるが、成立の時点との関係からは前代の推古朝を重視する説（伊藤等）も重要であらう。文献からの影響度と帰化人の実作からの影響度の問題、より具体的にどのようなように影響したかも問題とならう。

四 初期万葉の抒情

「簡潔な力強い表現の中に清冽の気を感し、おのずから湧き出る泉のような味わい……生まれ出たばかりのような自然な姿」（五味）、「主観句を使わずに主観が等価を発見し、技巧を弄さずに高朗なあるいは雄勁な、あるいは蒼古としたしらべを成すことができた」（西郷）初期万葉歌が、右に挙げたものを含めて、いかなる条件の下で成立したかを解明することがこの章の最大の課題であらう。

一～四で触れていない条件、ポイントとして次のようなものがある。

- (1) 歌の非独立性、非完結性
- (2) 相關の問題——実際にどれ程交換されたか
- (3) 歌の保存、伝承の問題
- (4) 文字の使用の問題
- (5) 漢詩文製作の問題

初期万葉歌と記紀歌謡

稲岡 「初期万葉の抒情」ということで曾倉さんからご報告をいただいているわけですが、初めに、記紀歌謡とどのような関係があるのか。あるいは直接関係を認めないというご発言もあるかもしれないと思いますが、あるとすればどういような関係があるのか。そういう点について、まず曾倉さんに口火を切っていただければ……。

曾倉 記紀歌謡との関係なんですけれども、この報告に書いてあります田辺さんの説のように、これは主として歌の味あいなどの点で、むしろ記紀歌謡と初期万葉のほうがつながりが深く、人麻呂のあたりからがらつと変わるというところに中心があるのだと思いますけれども、前代詩歌の終末部的世界であるという見方もありますが、私はそれよりはむしろかなり違うところのほうが多いのではないかと、抒情詩とか和歌とかいうものと歌謡とは根本的な違いがあると思うのですけれども、その違いのほうを重視したほうが有効ではないかと、そういうふうに思うわけです。

あとは書いてあるとおりですが、一たん区別して、もちろんそのとき、ことに『日本書紀』の終わりのほうの歌だとかあるいは物語歌として入っているものは、じつはこれは一般に記紀歌謡といっておりますけれども、歌謡であるかどうかかなり疑わしいものがあるわけなんです、そういうものを除いて考えれば歌謡と和歌というのはある程度分かれるのであろう。機能の違い、あるいは個性や独創性があるかないかという、そういう点でかなり分かれるだろうと思います。そう分けた上でなおかつ記紀歌謡に属すべきものに……、といいますか初期万葉よりも前の段階で抒情詩のようなものがあるかどうかということが問題だと思いますが、代表的な説として土橋さんの、物語歌という形で抒情詩が成立しているという説がありますし、益田さんのように前抒情的抒情、これはちょっとむずかしいことばなんですけれども、そういうものが先にあるのだという見方もあります。ですがそういう見方だけで十分に説明がつくのか、あるいはそういう見方がかなり有効に働いてくるのかと考えると、ぼくはかなり疑問に思っているわけです。それはあとで話が出る

と思いますが、初期万葉のいろいろな性格と結びつけて考えると、歌謡の中のあるものがある程度抒情的であつても初期万葉と同じだとは言えないような気がするわけです。一つの例として、報告にも書いておいたのですが、物語歌であれ、前抒情であれ、そういうものが可能になるためには普通の生活で歌でもって抒情するという経験がないとむずかしいのではないかと思いますし、それから方向が逆だということがあると思うんです。方向が逆だというのは初期万葉の場合でしたら既存の伝承歌謡を取り入れて、あるいは一部変えて自分の抒情にする、そういう方向で働いているわけですが、物語歌や前抒情の抒情といったようなものは、伝承の中へ入って行って、その主人公なり登場人物なりの心になつて抒情するという方向をとるわけで、逆なのです。この逆方向ということはかなり意味があるのではないかと思うわけです。記紀歌謡、上代歌謡といつてもいいのですが、それと初期万葉とはもちろん全く無関係だとは思われない、いろいろなものを継承しているとは思いますが、ただ、自然に歌謡から和歌が成立してくるといふふうには考えられないのではないかと、そこに何か新しい要素が入ってくる、あるいは基盤が変わってくる、とかいうことを考えなくてはいけないと思います。そういうところが具体的にどう違ってくるのかというのは、あとのほうで場の問題とか作者の問題その他にからんでくるのだと思います。

稲岡 土橋さんと益田さんの説があげられているわけですね。土橋さんは記紀の歌謡を民謡、宮廷儀礼歌、芸謡、物語歌というふうに分類をした上で説明をされている。その場合の民謡というものが一体どういふふうに初期万葉の歌と関係をしてくるのだろうか、あるいは宮廷儀礼歌が初期万葉の儀礼的な歌と比べた場合にどういふふうに関係があるだろうか、と考えていけばある程度問題がしぼられてくるのじゃないか、私はそういうふうに思います。ところで民謡といった場合に益田さんと土橋さんでは大きな考え方の違いがありそうに思いますね。これは益田さんばかりでなくて、中西さんも、民謡が非常に古い時代にあり得たといふふうには自分は考えないと、ごく最近出た『万葉の世界』の中で書かれている。益田さん自身も、『記紀歌謡』の中で書かれたところがありますね。そうするとそこでは土橋さんと益田さんは非常に大きな違いがあるわけです。そこに一つの大きな問題がありますね。そういう点に関して阿蘇さんどう

でしょうか。

阿蘇 私は民謡という言葉の使い方は非常にむずかしいと思うのですけれども、土橋さんのおっしゃっている民謡、いわゆる歌垣などにおける集団歌謡という意味に限定すればわかりやすいと思うのです。私は土橋さんの説にわりと近いのですけれども、その場合の民謡にはいわゆる儀礼歌謡とはかなり違うものがあると思うのですが、物語的な抒情歌というものの間には少なくとも外見上はほとんど変わらないものが多いのではないかと思います。物語歌というものもいま曾倉さんがおっしゃったように、個人的な歌が発生したあとでそれに類する物語歌ができる、また転用されるといった場合もあると思いますけれども、先立ってつくられるという場合も考えられるのではないかと思います。作歌能力における一般レベルと専門家との違いを考えるわけですが、しかしそれで全部がおおえらとも思えません。実際にいわゆる集団歌謡というふうにいわれているものなどを見ますと、形の上ではやはり繰り返しがあったりしまして、技巧的には古い形のものかたしかにあると思うのですけれども、発想といえますか表現内容の面では非常に区別しにくいものがあるのではないかと思います。ですから民謡といわれる物語歌、そして個人的な発想契機に基づく歌というものは実際にはなかなか区別しにくいと思います。集団歌謡というものの発生と個人的な歌というものは、場はたしかに違うのですけれども、発想の基底というふうなものはむしろ区別しにくかったということを最初に考えたほうが真実に近いのではないかと、そういうふうに私は思うのです。たとえば恋の歌なんというのは特にそういう感じが実際に歌を並べてみてするわけです。

曾倉 歌垣から恋の歌というのは、ぼくはちょっと別だと思ふんですよ。そちらは非常に関係が深いと思います。初期万葉に至っても……。巻二の相聞にある……あのへんのものも、大体独詠的な歌はありませんね。せいぜい鎌足のあの「吾はもや……」(九五)という歌——あれ以外はみんな掛合いをしているわけですね。だから相聞については今のようなことがいえると思うのですけれども、それはぼくは別だと考えるべきだと思ってあとのほうにあげたのですがね。もっとも、額田王の「君待つと……」(四八八)になると完全に独詠的な歌ですね。

阿蘇 そうですね。恋の歌の場合でもいろいろ考えなければいけませんけれども……。

稲岡 表現の上から見て、鈴木さんは、どんなふうに記紀歌謡と……。

鈴木 いまの民謡の問題については、阿蘇さんがおっしゃったこととほとんど同意見です。さきほどの物語歌というのと民謡というのは実際にはなかなか区別できないほど密着していると私は考えています。たとえば古事記の仁徳天皇の条に出てくる「つぎねふ山城女の……」という大根掘りのさまが大根のような白く豊満な女の腕を連想していく歌ですが、あれなども農耕集落のなかで生まれた恋の歌として人々に幾らでも歌い継がれているような民謡である、と同時に、それがいつの間にか物語としても結晶させられている。実はそのように物語に結びついて固有のかたちをもつてくるのが、逆にそれがもともと民謡であったことの証しになるとも考えられます。つまり物語の独自の結構に容易にあてはめられ通用しやすいほど、歌じたいの個性が強くないということです。集団的な没個性という民謡の性格があります。ヤマトタケルの物語の「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」にしても、もとは春先の野焼きでしょう。そうした農村の恋の歌が火攻めにあったヤマトタケルを表わしうる通用性をもっている。

こうした記紀歌謡に代表される古い民謡というものが一応考えられますが、それとは別に、やはり民謡という名前で呼ばれている一群の歌群が特に万葉時代の比較的終りごろにあるわけです。巻十一や十二の古今往来相聞歌を典型とする歌群ですね。その二つをどう区別すればいいかが問題です。しかし、こちらのほうを民謡と呼ぶのには私自身にはちょっとためらいがあるんです。ただ個性の度合の薄いという言い方をすれば両者の区別がはっきりしなくなる。万葉の場合には集団的といっても、いわゆる共同体的な連帯性を帯びていない。それに対して記紀歌謡などの古い民謡には共同体

内大臣藤原卿 采女安見兒を娶きし時作る歌一首

首

壺

り

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

哭

吹く

君待つとわが恋ひをればわが屋戸のすだれ動かし秋の風

社会でなければ成りたちえないような強靱な連帯性、つまり他人の歌が自分になり、自分の歌が他人の歌にもなり得るという発想だと思ふんです。さきほどの「つぎねふ山城女の」にしても「さねさし相模の小野の」にしても、集団の共通感情としても歌われている。そういう意味では民謡というものを一種の歴史性を超越した性格として考えてみることもできるんじゃないかと思うのです。他方の万葉では、その共同体社会の残滓を帯びた集団的発想ぐらいじゃないか。だから個性の度合の強い大作家の作がそこから連続して富士山の裾野のように広がっている。逆にいえば、類同性をうち破った個性的存在が作家だということになる。そしてそうした個性を存在させる時代は、自他が通いあう共同体社会ではないということになります。いま集団性ということを言いましたけれども、たとえば一つの徴証として、地名とか人名というふうな固有名詞を入れかえればいくらかでも通用するという性格があると思うのです。個性を越えた集団の論理のようなものですね。こうした発想は、もちろん記紀歌謡、つまり民謡にみられるわけですが、万葉のなかにもそれに近いものがある。それはやはり歴史性を越えた性格だろうと思うんです。古い共同体社会が崩れても、なおも民謡的な形式として集団のなかでうけつがれたものだと考えられるのです。

曾倉 いま民謡ということばを、末期万葉のおそらく巻十一、十二の作者不明歌などを意識して言われたと思いますけれども、あれを民謡という人が相当たくさんおられますね。それとは区別したほうがいいんじゃないかという鈴木さんのご発言はもっともだと思います。あれを一緒にして民謡、民謡と言われると話がわからなくなる。阿蘇さんどうでしょうか。

阿蘇 そうですね、ちょっとお説に反対のようなんですけれども、あれこそがほんとうの民謡じゃないかとも私は思います。ただ私は民謡ということばはやはり非常に厳密に使いわけなければいけないと思ひまして、名前をほんとうは変えなければいけないと思うんですけれども、たとえば土橋さんは、民謡というものは『風土記』の歌謡の中から数首だけ取り出して、ほんとうに民謡と思われるものはこれぐらいしかないとおっしゃったのですけれども、そういう意味での民謡ということばでいえば『万葉集』のあの巻十六のおしまいのほうにあります越中の国の歌(三八八―四)とか、